

## ■既成概念にとらわれず価値観を見直す

パーソナル向け液晶デジタルカメラという、新しい市場を切り開いた「QV-10」の発売は1995年のことでしたが、その商品化にいたる過程にはさまざまな試行錯誤がありました。

デジタルカメラを開発するにあたり、当初はカメラ機能単体ではなく、デジタルカメラ機能を組み込んだ液晶テレビという形で商品企画を立てました。しかし開発を進めるうち、ユーザーにほんとうに新しい価値を提供できる機能に絞り込むべきと考え、最終的にはテレビ機能を外し、カメラ専用機として商品化を決めました。そして当時家庭に普及し始めていた、パソコンへの画像入力ツールとしての位置付けを明確にし、来るべきマルチメディア時代のツールとして「QV-10」を世に送り出しました。

カシオがこのような画期的な製品を生み出したのは、従来の銀塩カメラの延長線上でデジタルカメラを考えなかったからだと思います。「QV-10」のレンズは単焦点、ストロボはなし、画素数は25万画素と、従来のカメラと単純比較すれば誇るスペックではありません。私たちが取り組んだのは価値観を変え、「撮ったその場ですぐ画像が見られる」という今までにない利便性を提供し、パソコンとの連携を高めて新しい画像文化を創造することでした。そこにはカシオが今日ま

で受け継ぐ「0→1」の発想があります。

## ■デジタルカメラならではの利便性を見つめる

2002年6月、カシオは“ウェアラブル・カードカメラ”という新しいコンセプトを提案した、初代EXILIM「EX-S1」を発売しました。当時はデジタルカメラ市場に多くのメーカーが参入し、性能競争が激化していました。お客様が製品を選ぶ際、画素数というわかりやすい尺度が重視される傾向が顕著になりましたが、その流れに乗るだけでは、カシオの挑戦は満たされません。

ひとつのヒントとなったのは、デジタルカメラのデザインは、フィルムカメラに影響されないということです。従来のカメラは目的がある時にだけ持ち出すものですが、フィルムのいないデジタルカメラは常に身に付けて、撮りたい時に撮るという使い方も容易なものです。この考えから生まれたのが、胸ポケットに入る薄さで、取り出してすぐに使える初代EXILIMです。この製品もまた、現在の主流となるスタイリッシュコンパクトという市場を生み出しています。

2003年の春には、当時最高水準のスペックをもつEXILIM ZOOM「EX-Z3」を発売しています。性能を絞り込んだ商品を出す一方で、技術開発の歩みを止めず、性能を追求し続ける。そのことが、今日のEXILIMの進化につながったと私は思っています。

## ■「ハイスピード」という第三の開拓へ

2008年、デジタルカメラの価値創造の歴史に、カシオは「ハイスピード・テクノロジー」という第三世代の革新をスタートさせました。カシオの製品開発は、今の延長線上で次を考えるのではなく、10年後、20年後の“あるべき姿”を描くこと。今、カシオが“あるべき姿”として考えているデジタルカメラ像は、「シャッターレス」です。

電子化によってカメラは露出やピント合わせなどのオート化を進めてきましたが、「シャッターを押す」行為は人間によってなされています。シャッターを人が押すからこそ、撮られる人が緊張してしまったり、手ブレが生じたり、決定的瞬間を逃してしまうことがあるわけです。

「当たり前」「カメラとはそんなものだ」と誰もが諦めていたそのことに、カシオはハイスピードカメラという新しい回答を提示しました。これはシャッターを押すという行為もデジタル化し、ハイスピードで動く被写体を切り取っていくという発想です。このテクノロジーは毎秒30枚の超高速連写が可能であり、連写した画像の中から、ブレやまばたきのない画像を自動的に選んでくれる機能を備えています。

ハイスピードカメラは、例えばこどもの一瞬の自然な表情などもとらえることができますし、これまで見えていなかったものを撮ることもできるでしょう。カシオはこれを特別な機能ではなく、

将来的なデジタルカメラのスタンダードだと考えています。

## ■動画の楽しさ・創る楽しさをデジタルカメラに

もうひとつの新機能は、撮影した動く被写体を切り抜き、背景となる別の静止画と合成ができる「ダイナミックフォト」です。「ダイナミックフォト」はクリエイティブな視点から、新しい写真文化を創造するためのツールとして利用していただきたいと思い、開発した機能です。

デジタルカメラは写真の撮る楽しさや見る楽しさを大きく広げましたが、「創る楽しさ」という面では、静止した被写体を撮った画像を加工するといったレベルから抜け出せていなかったと思います。「ダイナミックフォト」は、動く被写体を超高速で連写し、切り抜いた画像を背景となる別の静止画の上に配置させることで、創造性に富んだ作品を楽しむことができます。

「ダイナミックフォト」は、世界のプロ映像作家の方々にもぜひ使っていただき、新しい映像表現の世界を切り開いていただきたいと思っています。家族でこどもの動画を切り取って、海外の風景やお茶碗の上に乗せて楽しむなど、気軽な使い方にも新しいコミュニケーションの可能性があるとと思っています。これまでになかった発想と技術を結び付けて、多くの人々が普通に使用していただける、新しい市場を創造する。それがカシオの「0→1」の創造だと思います。

製品の“あるべき姿”を描き、新しい需要を創造する。  
デジタルカメラという新市場を切り開いた「QV-10」から今日にいたる、  
カシオのデジタルカメラの革新の歴史は  
「0→1」の発想を体現するものです。  
2009年、第三世代へと進化したデジタルカメラの歴史を、  
開発者である中山統轄部長に伺いました。



EXILIM ZOOM EX-Z400

新開発EXILIMエンジン4.0の高速画像処理により、撮影した動く被写体を切り抜き、背景となる別の静止画に合成できる「ダイナミックフォト」を搭載。



HIGH SPEED EXILIM EX-FC100

30枚/秒の超高速連写や最大1,000fpsのハイスピードムービーを、回路やセンサーユニットの小型化によって、手のひらに収まる小型サイズで実現。

## 特集 1

# 「0→1」の発想でデジタルカメラ市場に

# 新しい価値を

中山 仁

QV事業部 開発統轄部長

デジタルカメラ「QV-10」の商品企画を担当。以来、カシオのデジタルカメラ開発の中心的リーダーとして活動。